

上級日本語学習者における「わけだ」の意味機能の認識

—話し言葉から書き言葉への変更を通して—

安藤 淑子

Advanced Japanese Language Learners' Recognition of Semantic Function of "wakeda": A Study through the Conversion from Spoken to Written Expressions

ANDO Yoshiko

Abstract

The Japanese term, "wakeda", is one of the challenging words for the learners to master the usage. It can also be characterized mainly as a spoken expression rather than a written one.

This study conducted a comparative survey of non-native Japanese speakers (NNJS), who are also advanced Japanese learners, with native Japanese speakers (NJS) to find out the extent of the advanced NNJS learners' semantic recognition of "wakeda". In doing so, the study asked the participants to convert spoken expressions containing "wakeda" into written ones with the same meaning to compare and analyze how the use of "wakeda" is handled in the both.

The result demonstrated the three usages of "wakeda" which: (1) mostly remains after conversion; (2) are replaced with "noda", the written equivalent of "wakeda"; and (3) does not affect the meaning of the sentence. In comparison with the result of NJS group, "wakeda" used by NNJS tend to remain the same after conversion, and their conversion into "noda" was less frequent.

キーワード：話し言葉、書き言葉、「わけだ」、上級学習者

Key words: Spoken expressions, written expressions, "wakeda", advanced learners

1. はじめに

日本語における話し言葉と書き言葉の相違は、表記、語彙、表現、文体から構成に至るまで多岐に渡る。論文やレポートといった学術的な文章を書く日本語上級学習者にとって、これらの知識は必須である。

本稿では、留学生の日本語教育における書き言葉の指導に関して、特に「わけだ^{註1}」の使用に焦点を当て、学習上の課題を探る。ここで「わけだ」を取り上げるのは、学習者にとって「わけだ」が習得の難しい表現項目の一つであること（劉 1996、市川 1997）、また従来、「わけだ」は話し言葉に特徴的な表現であると言われているが、学習者に書き言葉との差異がどのように認識されて

いるのかを知るためである。

以下、本稿ではまず「わけだ」が話し言葉に多く出現することを、文章ジャンル別の調査によって明確にする。次に、日本語母語話者（以下、NJS）と上級レベルの日本語非母語話者（以下、NNJS）が、文章を話し言葉から書き言葉に変換する際、「わけだ」をどのように処理するかという点について調査し、結果の分析を行う。その際、NJSと対比することによって、NNJSの「わけだ」の認識に見られる課題を明らかにし、指導上の留意点を考察する。

2. 「わけだ」の使用に関するジャンル別調査

調査資料として、書き言葉の中から、不特定多

数の読み手を対象とし且つ改まった文体を用いる「論文」、「論説文」を選択した。反対に話し言葉の中から、眼前に聞き手を持ち、初期形態が音声言語である「講演」と「対談」を選択した（調査資料1を参照）。今回の調査では、「講演」、「対談」共に出版という形で編集された文字資料を使用している。

論文については、文系論文（ここでは言語・教育系）104編と、理系論文（ここでは工学・医療系）の102編をそれぞれ対象とした。

その結果、文系論文中「わけだ」の使用が見られたのは21編で、全体の20.1%にあたる。使用された「わけだ」の総数は28個であった。また、「わけだ」が使用された論文の平均使用数は1.4である。なお、理系論文中には、「わけだ」の使用が見られなかった。

次に、調査した論説文は130編である。この中で、「わけだ」の使用が見られたのは8編で、全体の6.2%にあたる。使用された「わけだ」の総数は10個であった。「わけだ」が使用された論説文における平均使用数は1.25である。

話し言葉である講演の調査は15編の資料を用いた。調査の結果、すべての講演に「わけだ」の使用が見られ、使用総数は全体で458個であった。また、講演1編中の「わけだ」の平均使用数は30.5である。

対談は15編を調査した。すべての対談に「わけだ」の使用が見られ、使用総数は503個であった。対談1編中の「わけだ」の平均使用数は33.5である。

このように、改まった書き言葉である論文・論説文には、「わけだ」の使用が極めて少ない。一方、話し言葉である講演・対談においては、「わけだ」の使用が一般的であり、使用数も圧倒的に多い。これは、NJSにおいて、書き言葉と話し言葉における「わけだ」の使用に明確な違いがあることを示している。

この点を踏まえて、以下では、NNJSにおいてもNJSと同様な差異が存在するのか、存在するとしたらそれはNJSと同じような傾向を持つのか、或いはNNJS特有の傾向があるのかという点

について検証を行う。

3. 書き言葉変換に見られる「わけだ」の処理

3-1 調査

本調査では、講演文の一部を話し言葉から書き言葉に変換する際、「わけだ」にどのような特徴があるのかを見た。調査に用いた引用部分（調査資料2参照）には、以下に示すような「わけだ」が(1)から(18)までの文に19箇所出現している。

- (1) 実際、人間の脳の中には、百四十億の神経細胞が入っているといわれますが、現実には普通の人が一パーセントないし二十パーセントぐらい使っていてあとは使っていない。いわば眠っているわけですよ①けど、生きているわけですよ②。
- (2) 自分自身にも見えないように貯蔵されているわけですよ③。
- (3) 要するに自分自身を開拓してみる、見えない部分を掘りおこしていく、そういうふうにするわけですよ④。
- (4) その自信とプラス運があつて、いろいろあちこちで賞をもらったりしているわけですよ⑤。
- (5) 母に聞いたり、僕自身思い出すことは、お風呂に入って自分の手が、水の中では軽く、外へ出ると重い、これはなぜだろうと考えたりするわけですよ⑥。
- (6) あるいは、小さい目でどうして大きな家が見えたりするのだろうかと思うわけですよ⑦。
- (7) 受験勉強に押しつぶされている人は別として、たいていの子供にはそういう自然な疑問というものがあるわけですよ⑧。
- (8) そういう疑問を出したときに、「何、そんなこと聞いてわかりきっていることじゃないの、そんなことやってるなら早く勉強しなさい」といってしまうと、それを考える時間、喜びがなくなるわけですよ⑨。
- (9) 幸い僕の母は、教育がないために、僕と一緒に考えてくれるわけですよ⑩。

- (10) 小さい目で大きいものがどういて見えるのか、一日ぐらいわからないといって一生懸命考えてくれるわけです⑪。
- (11) 翌日、「私には、わからんけ、お医者さんところ行ってみようじゃないか」というわけです⑫。
- (12) 田舎ではインテリといえお医者さんか神主さんぐらいで、お医者さんなら目のことも知っているだろうとあって、一緒に行ったわけです⑬。
- (13) それから僕の母は、学はないけど、知恵ともっているところもあって、子供が全部で十五人いたわけです⑭。
- (14) 母がある時、喜んでみせるわけです⑮。
- (15) 三十、四十になっても親に迷惑をかけるのもいるわけだ⑯から、僕の兄弟がそうだとどういのではないですよ、あとでおこられちゃうから、「苦労するけど、一人だけ親を喜ばす子供がいる」(笑) そういってくれたというんです。
- (16) そういわれてみると僕も考えちゃうわけだ⑰。
- (17) ひょっとして僕じゃないかな、と思うわけです⑱。
- (18) 親を大切にすることが自分の喜びになる、そういうふうになってこなければ、いくら親を大切にすることが、大事なんだ、そういう世の中なんだと一時間、二時間、三時間、五年間講義を続けても、子供というのは変わらないわけです⑲。

被調査者はNJSが92人、NNJSが55人である。NNJSはすべて留学生で、日本語レベルは上級である。

調査にあたっては、NJS、NNJSにそれぞれ同じ引用文を示し、(1)文章を書き言葉に直すこと、(2)文末の「です・ます」体を「だ・である」体に直すこと以外は、各自が自由に書き直してかまわない、という2点のみ指示を与えた。文章が印字された用紙には、本文の行の上下に余白を設け、修正した部分を書き込むことができるようにした。

3-2 結果と分析

NJS、NNJSそれぞれが「わけだ」①から「わけだ」⑲に対して行った変更を分類・集計し図に示した(図1)。

NJSには全体の37%、NNJSには全体の49%に「わけだ」が残存している。すなわち、NNJSにおいてはほぼ半数の「わけだ」が、話し言葉から書き言葉への変更の際に、修正を受けなかったということである。

「わけだ」と「のだ」以外の表現(「その他」)への変更は、NJSが35%、NNJSが37%とほぼ並んでいるが、「のだ」への変更はNJSが27%であるのに対し、NNJSが14%と半分程度である。このことから、NJSには話し言葉から書き言葉への変更において「わけだ」と「のだ」の意味の類似性が認識されているのに対し、NNJSにおいては「わけだ」の代替物として「のだ」の認知度が低いことがわかる。

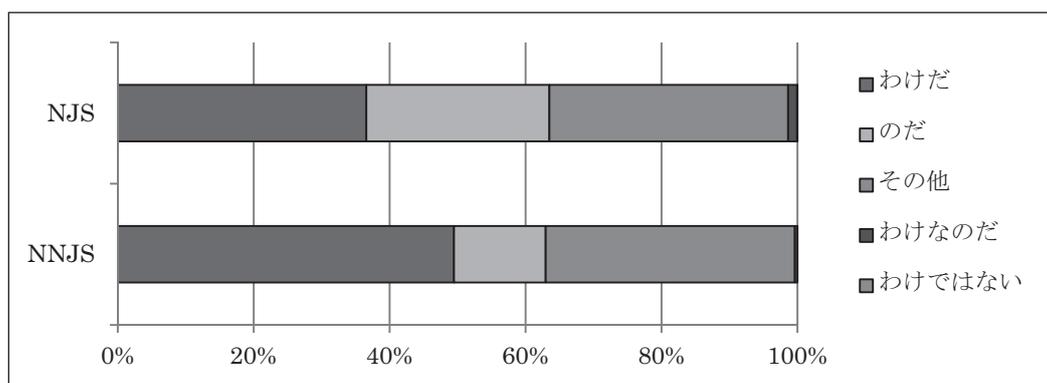


図1 「わけだ」の変更種別割合

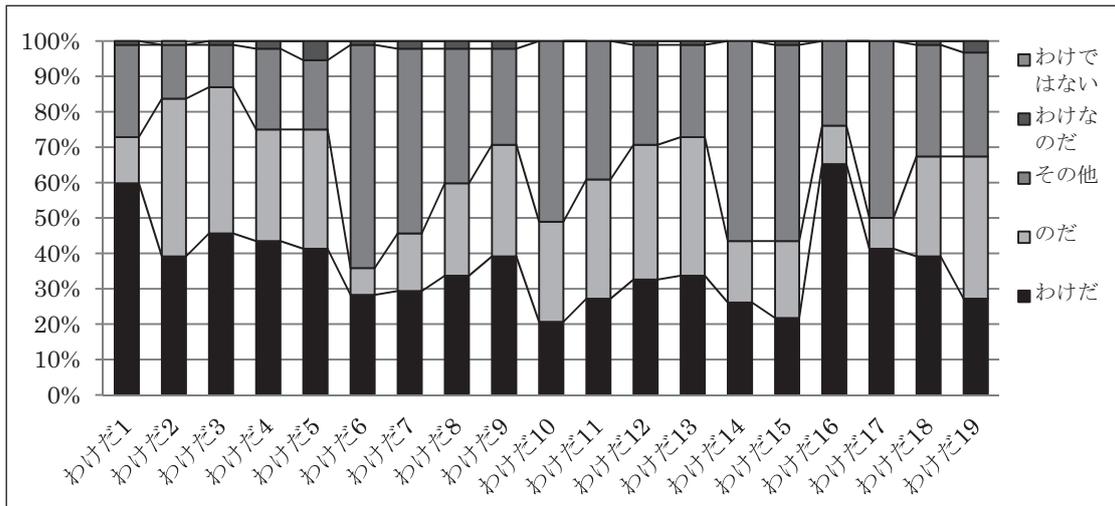


図2 NNJSにおける「わけだ」の変更状況

次に、個々の「わけだ」の変更の状況を、NJSとNNJSに分けて示す(図2、図3)。

まず、NJSについて見ると(図2)、「わけだ」が「のだ」「その他」の2種よりも多く選択されているのは、「わけだ」①、③、④、⑤、⑨、⑬、⑯の7か所であり、特に次に示す「わけだ」①と⑬において残存が多い。

- 実際、人間の脳の中には、百四十億の神経細胞が入っているといわれますが、現実には普通の人々が十パーセントないし二十パーセントぐらい使っていてあとは使っていない。いわば眠っているわけです①けど、生きているわけです。
- 三十、四十になっても親に迷惑をかけるのもいるわけだ⑬から、僕の兄弟がそうかどうかというのではないですよ、あとでおこられちゃうから、「苦勞するけど、一人だけ親を喜ばす子供がいる」(笑) そういつてくれたということです。

「わけだ」①が接続する文は、前出の「二十パーセントぐらい使っていてあとは使っていない」の部分の言い換えたものである。また、「わけだ」⑬は、次に示すように、実際には前文の理由説明になっている。

- 古い師の所へ行ったら「子供がたくさんあり

ますね」といって「子供がたくさんあると苦勞する」といわれた。三十、四十になっても親に迷惑をかけるのもいるわけだから、(略)。

NJSにおいて「その他」の表現が他の2種よりも多く選択されているのは、⑥、⑦、⑧、⑩、⑪、⑭、⑮、⑰の8箇所である。一方、②、⑫、⑬、⑱では、「のだ」が他の2種よりも多く選択されている。このことから、「のだ」と交換可能である「わけだ」と、そうではない「わけだ」が存在することがわかる。

「のだ」への変更が多かったのは次の文である。

- 実際、人間の脳の中には、百四十億の神経細胞が入っているといわれますが、現実には普通の人々が十パーセントないし二十パーセントぐらい使っていてあとは使っていない。いわば眠っているわけですけど、生きているわけです②。
- 翌日、「私には、わからんけ、お医者さんとこ行ってみようじゃないか」というわけです⑫。
- 田舎ではインテリといえばお医者さんか神主さんぐらいで、お医者さんなら目のことも知っているだろうと、一緒に行ったわけです⑬。
- 親を大切にすることが自分の喜びになる、そういうふうになってこなければ、いくら親を

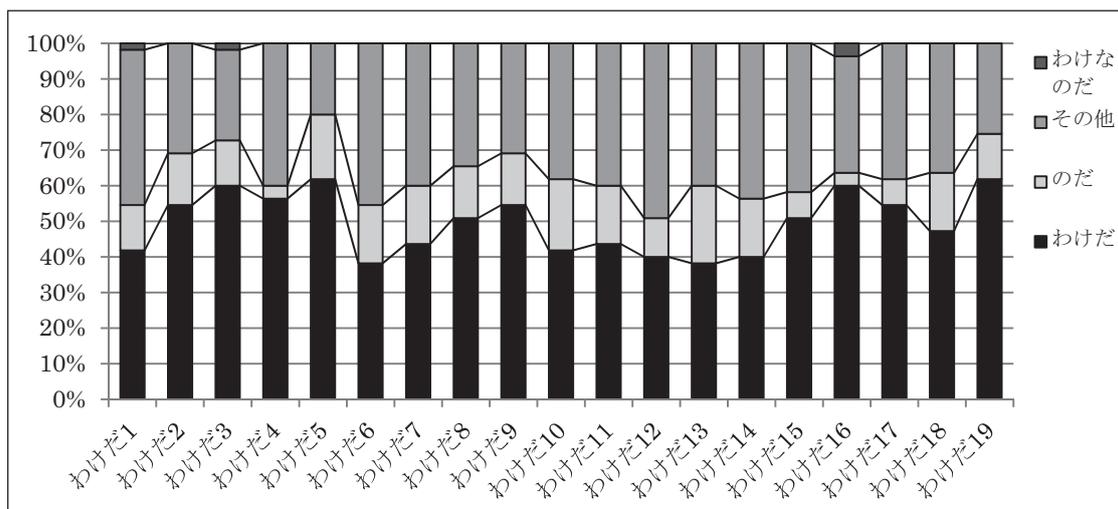


図3 NNNJSにおける「わけだ」の変更状況

大切にすることが、大事なんだ、そういう世の中なんだと一時間、二時間、三時間、五年間講義を続けても、子供というのは変わらないわけです⑬。

なお、「その他」の表現への変換は、単純に「わけだ」の切り捨てという形でなされることが多い。たとえば次に示す⑭は、「考えたりする／考えたりすることである／考えたりした／考えたりしたことがある／考えたりしたことである」というような変更がなされている。また、同様に⑮は「聞いたりした／聞いたりしたことだ／聞いたことがある／聞く／聞いたり」に変更されている。

- たとえば、母に聞いたり、僕自身思い出すことは、お風呂に入って自分の手が、水の中では軽く、外へ出ると重い、これはなぜだろうと考えたりするわけです⑭。
- あるいは、小さい目でどうして大きな家が見えたりするのだろうかと聞くわけです⑮。

さらに、⑯の文末は「いた／いて」に、⑰は「喜んでみせた／みせたことがあった／みせたことがある」に、⑱は「考えてしまう」のように端的に「わけだ」の削除という形で変更されている。

- それから僕の母は、学はないけど、知恵ともっているところもあって、子供が全部で十五人

いたわけです⑯。

- 母がある時、喜んでみせるわけです⑰。
- そういわれてみると僕も考えちゃうわけだ⑱。

次に、NNJSについて見ると（図3）、「わけだ」の残存率が一貫して高く、NJSに見られるような上下の変動幅があまりない。

NNJSにおいては、①、⑥、⑫、⑬、⑭の5箇所を除いて「わけだ」の選択が他の2種よりも多い。反対に「のだ」の選択は、①から⑱のいずれにおいても他の2種を上回ることはない。

また、「その他」の表現への変更が「わけだ」を上回る場合にも、両者の割合はほとんど同じである。

NNJSにおいて最も多く「わけだ」の残存する⑱は、先のNJSの調査結果では比較的残存数の少ないものであり、一方で、NJSにおいて残存数の多い①は、NNJSにおいて残存数の少ない「わけだ」である。このように、両者の間に類似のパターンを見出すことは困難である。

- 親を大切にすることが自分の喜びになる、そういうふうになってこなければ、いくら親を大切にすることが、大事なんだ、そういう世の中なんだと一時間、二時間、三時間、五年間講義を続けても、子供というのは変わらないわけです⑱。

4. 考察

寺村 (1984) は、モダリティという観点から「わけだ」を分析し、その意味機能を(1) 事柄 P からの当然の帰結 Q、(2)異なる観点の提示、(3)「Q わけだ」の形で根拠のある立言を示す、の3つに分類している。先の調査において NJS における残存数が多い「わけだ」のうち、⑩は寺村の言うところの「当然の帰結」を、⑪は、「異なる観点の提示」を示していると考えてよいだろう。

また、宮崎他 (2002) では、「わけだ」における「P → Q」関係（事柄 P とその帰結である Q）の論理的必然性が薄れると、意味機能が「のだ」に近接すると述べている。このことから、「のだ」に近接した意味機能を持つ「わけだ」が、書き言葉においては「のだ」に変更されることができると考えられる。

一方、NJS によって削除された「わけだ」について、そのすべてが寺村の挙げた(3)の「根拠ある立言を示す」ものであるか否かは検討が必要である。いずれにしても、話し手の態度に関わるこの種の「わけだ」は、今回取り上げた講演資料のように多用されることがあり、学習者に意識させるためにも、話し言葉における「わけだ」の用法の一つとして積極的に取り上げるべきだろう。

以上、今回調査を行った話し言葉から書き言葉への「わけだ」の変更には、次のような3つの特徴が見出された。

- (1) 「帰結」という論理的な関係が明らかである場合、或いは先行部分の「言い換え」である「わけだ」は、書き言葉においても残存する可能性が高い。
- (2) 論理的な関係性が薄く、結果として「のだ」と意味機能が近接する「わけだ」は、書き言葉への変更の際して「のだ」に置き換えられる可能性が高い。
- (3) 話し言葉に使用される「わけだ」の中には、書き言葉において不必要と見なされるものが含まれる。

今回の調査における NJS と NNJS の「わけだ」の変更に見られる不一致は、学習者が「わけだ」の持つ意味の多様性をまだ十分に認識していない

ことを示している。また、話し言葉から書き言葉への変更に関連する「わけだ」から「のだ」への移行は、「わけだ」と「のだ」の類似性と相違点に関する理解が必要であり、留意すべき指導項目の一つでもある。

5. まとめ

「わけだ」は、書き言葉よりも話し言葉において多く使用される表現である。本稿では話し言葉を書き言葉に変換するという作業を通して、NJS と NNJS の「わけだ」の処理に見られる差異を観察した。

その結果、上級レベルの学習者においても「わけだ」の意味機能、特に話し言葉と書き言葉における用法の違いに関する認識が不十分であることが明らかになった。すなわち、(1)書き言葉で使用される論理的関係性、及び言い換えの「わけだ」、(2)意味機能が近接する「のだ」に置き換えられる「わけだ」、(3)書き言葉ではほとんど使用されない、話し言葉に特徴的な「わけだ」の3種の相違を、明確には認識していないということである。

指導の際には、「わけだ」単独の意味の提示に留まらず、話し言葉や書き言葉の中で使用される具体的な「わけだ」の用例を示すなど、学習者の理解を高める工夫が必要だろう。

注

- 1) 本稿で扱う「わけだ」はすべて肯定形の形（「わけだ」「わけだ」等）である。否定形の「わけだ」（「わけではない」「わけがない」「わけにはいかない」等）は、それぞれが個別の意味を持つ表現形式であるためここでは扱わない。

参考文献

- 1) 市川保子 (1997) 『日本語誤用例小辞典』凡人社
- 2) 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味』第二巻、くろしお出版
- 3) 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃 (2002) 『新日本語文法選書4 モダリティ』くろしお出版
- 4) 劉向東 (1996) 「『わけだ』文に関する一考察」『日本語教育』88号、pp.49-60

調査資料 1

1) 文系論文

A『日本語教育学』129号(2006)、B『日本語教育学』130号(2006)、C『日本語教育学』131号(2006)、D『日本語の研究』第2巻4号(2006)、E『日本語の研究』第3巻1号(2007)、F『日本語の研究』第3巻2号((2007)、G『社会言語科学』第8巻第2号(2006)、H『社会言語科学』第9巻第1号、I『社会言語科学』第9巻第2号、J『日本語文法』5巻1号(2005)、K『日本語文法』5巻2号、L『表現研究』第83号(2007)、M『表現研究』第84号(2007)、N『表現研究』第85号(2008)、O『表現研究』第86号(2008)

2) 理系論文

A『日本建築学会構造系論文集』Vol75,No.650、B『人間工学』Vol.46,No1、C『人間工学』Vol46,No.3、D『人間工学』Vol46,No.5、E『日本社会精神医学会雑誌』19巻第1号、F『日本社会精神医学会雑誌』第19巻第2,3号、G『日本社会精神医学会』第20巻第1号、H『保険学研究』第22巻第1号、I『人間工学』Vol4,No.1、J『人間工学』Vol4,No.2、K『老年精神医学雑誌』Vol.21,No.3、L『近畿大学医学雑誌』第35巻2号、M『日本機械学会論文集』第75巻751号、N『日本機械学会論文集』第75巻752号、O『工学院大学研究報告書』第108号、P『日本音響学会誌』Vol.65,No.11、Q『日本音響学会誌』Vol.65,No12、R『日本音響学会誌』Vol.66,No1、S『日本音響学会誌』Vol.66,No.2、T『日本音響学会誌』Vol.66,No.3、U『日本音響学会誌』Vol.66,No.6

3) 論説文

『日本の論点 2006』文藝春秋編、文藝春秋

4) 講演

A『智慧の実を食べよう』たく摩武俊、びあ、B『智慧の実を食べよう』吉本隆明、びあ、C『智慧の実を食べよう』

だ』小野田寛郎、びあ、D『智慧の実を食べよう』谷川俊太郎、びあ、D『智慧の実を食べよう』谷川俊太郎、びあ、E『学問は驚きだ』岩井克人、びあ、F『学問は驚きだ』松井孝典、びあ、G『学問は驚きだ』山岸俊夫、H『学問は驚きだ』川勝平太、びあ、I『日本語よ どこへ行く』井上ひさし、岩波書店、J『日本仏教の可能性 現代思想としての冒険』末木文美士、新潮文庫、K『日本人の「あの世」観』梅原猛、中公文庫、L『司馬遼太郎全公園1』司馬遼太郎、朝日文庫、M『加藤周一戦後を語る』加藤周一、かがわ出版、O『歴史をどう見るか 名編集者が語る日本近現代史』粕谷一希、藤原書店

5) 対談

A『仏教の思想 8 不安と欣求<中国浄土>』塚本善隆・梅原猛、角川ソフィア文庫、B『仏教の思想 7 無の探究<中国禅>』柳田聖山・梅原猛、角川ソフィア文庫、C『仏教の思想 5 絶対の真理<天台>』田村芳朗、梅原猛、

角川ソフィア文庫、D『仏教の思想 4 認識と超越<唯識>』服部正明・上山春平、角川ソフィア文庫、E『存在の耐えがたきサルサ』村上龍・渡部直己、文春文庫、F『存在の耐えがたきサルサ』村上龍・河合隼雄、文春文庫、G『文学ときどき酒』丸谷オ一・河盛好藏、中公文庫、H『文学ときどき酒』丸谷オ一・大岡信、中公文庫、I『多生の縁』玄侑宗久・山崎章郎、文春文庫、J『多生の縁』玄侑宗久・坪井栄孝、文春文庫、K『日本人と「日本病」について』岸田秀・山本七平、文春文庫、L『日本人の内と外』司馬遼太郎・山崎正和、中公文庫、M『吉本隆明対談選』吉本隆明・佐藤泰正、講談社文芸文庫、O『吉本隆明対談選』吉本隆明・谷川俊太郎、講談社文芸文庫

調査資料 2

(全文)

実際、人間の脳の中には、百四十億の神経細胞が入っているといわれますが、現実には普通の人々が十パーセントないし二十パーセントぐらい使っていてあとは使っていない、いわば眠っているわけですけど、生きているわけです。自分自身にも見えないように貯蔵されているわけです。「人生とは何ぞや」という人がいますが、人生とは長い一生をかけて自分自身を発見する過程である。要するに自分自身を開拓してみる、見えない部分を掘りおこしていく、そういうふうにするわけです。

個人的な話ですけど、僕は昔から自分のモットーとして、要するに人以上に考えればいいんだ、人以上に時間をかければいいんだ、そうすればかならず自分でできる、それが今までの研究生活、日常生活のいろんなことに基本的にある僕のゆるがない信念であり、自信なんです。その自信とプラス運があって、いろいろあちこちで賞をもらったりしているわけです。

そういう僕の自信の基礎にあるものは、人間十分に頭を使っていないんじゃないか、使っていないのがたくさんある。人が百四十億の細胞の十パーセントしかつかっていないときに、僕が十五パーセント使えば、当然何か良いものができるはずですよ。

あるいは人が十分時間をかけるときに、自分は二十分、人が一年かけるときに自分は二年かければ、僕でも何かできるだろう。話は飛びますが、僕自身の母のことを思い出してみても、どういう教育をしてくれたか、一口に言って僕の母は教育らしい教育は何もしてくれなかった。だけど一つだけ僕に教えてくれたこと、それは、何か物を考えることに意味があり、物を考えることに何か喜びがあるんだということをお母さんに教えたと思うんです。

母に聞いたり、僕自身が思い出すことは、お風呂に入っている自分の手が、水の中では軽く、外へ出ると重い、これはなぜだろうと考えたりするわけです。あるいは、小さい目でどうして大きな家が見えたりするのだろうかと聞くわけです。受験勉強に押しつぶされている人は別にして、たい

ていの子供にはそういう自然な疑問というのがあるわけですね。

そういう疑問を出したときに、「何、そんなこと聞いてわかりきっていることじゃないの、そんなことやってるなら早く勉強しなさい」といってしまうと、それを考える時間、喜びがなくなるわけです。

幸い僕の母は教育がないために、僕と一緒に考えてくれるわけです。小さい目で大きいものがどうして見えるのか、一日ぐらいわからないといって一生懸命考えてくれるわけです。翌日、「私には、わからんけ、お医者さんとこ行ってみようじゃないか」というわけです。田舎ではインテリといえばお医者さんか神主さんぐらいで、お医者さんなら目のことも知っているだろうとあって、一緒に行ったわけです。そのお医者さんば説明してくれたことは覚えているけど、いったいどういう説明だったかは覚えてないんです。なにせ大昔のことですから。

だけど、そういうことの中に、何か自分で考えてみるのが楽しいんだと、考えることに意味があるんだと、何か一日二日考えてみる、そういうことを教えてくれたと思うんです。

それから僕の母は、学はないけど、知恵を持っているところもあって、子供が全部で十五人いたわけです。子供にとっては、わいわいやって楽しかったわけですけど、親はたいへんだったと思うんです。

母がある時、喜んでみせるわけです。占い師の所へ行ったら「子供がたくさんありますね」といって「子供がたくさんあると苦労する」といわれた。三十、四十になっても親に迷惑をかけるのもいるわけだから、僕の兄弟がそうだというのではないですよ、あとでおこられちゃうから、「苦労するけど、一人だけ親を喜ばす子供がいる」(笑) そうしてくれたというんです。

そういうわれてみると僕も考えちゃうわけだ。ひょっとしたら僕じゃないかな、と思うwかえです。母は同じことを他の子供一人一人に言ってたんじゃないかと思うけど。(笑)

とにかく、子供に向かって親を大切にしなければだめですよ、とあったってだめなんです。子供自身が、自分で考えて、親を大切にしたいと何かのきっかけで思い出す。親を大切にすることが自分の喜びになる、そういうふうになっていなければ、いくら親を大切にすることが、大事なんだ、そういう世の中なんだと一時間、二時間、三時間、五年間講義を続けても子供というのは変わらないわけです。要するに違う人間ですからね。

また、話が飛びますけど、とにかく今の世の中でもっと皆、頭を使うべきじゃないかと思うんですよね、たくさんの神経細胞が頭の中にあるんですから。

『広中平祐の家庭教育論』広中平祐 講談社より